【原文】

遣　懐　　杜牧

落魄江南載酒行
楚腰腸斷掌中輕
十年一覺揚州夢
占得青樓薄倖名

【読み下し文】

懐いを遣る

江南に落魄し　酒を載せて行く
楚腰腸断　掌中に軽し
十年　一たび覚む　揚州の夢
占め得たり　青楼　薄倖の名

【現代口語文】

胸中の憂悶を払いのける

水辺のさと江南で、自由奔放に遊んだ若き日々、どこに行くにも酒びたりであった。
楚の宮女のような、ほっそりした腰つきの遊女たち。
愛くるしいその身体は、手のひらの上でも舞えそうな軽やかさであった。
うかうかと過ごした十年の青春、艶やかな揚州の夢が一たび覚めた今、
わが身に得たものは。色街の浮気者という、空しい評判だけたのだ。

【語彙説明】

○遣懐――詩を作って、胸中にわだかまる思いを解き放つこと。遣悶・遣興の類語。淮南節度使牛僧孺の幕僚であった杜牧は、大和九年（八三五年）、三十三歳の春、監察御史に任命された。本詩は、揚州から長安に向かう直前の作であろう。『才調集』四には、「題揚州」（揚州に題す）に作る。この詩題（揚州で詠む意）は。作成年代の傍証となろう。

○落魄――ここでは、ラクタクと読み、自由気ままま、放縦不羈を表わす、口語系の擬態語（畳韻）。通常の「ラクハク――落ちぶれて漂泊する」意味ではない。『才調集』には「落托」。晩唐の孟棨『本事詩』高逸篇には「落拓」に作る。いずれも音通し、三者は表記上の差異にすぎない。

○江南――ここでは、揚州・宣州・洪州などの地を指す。晩唐の高彦休『唐闕史』（『太平広記』二七三所引）・『本事詩』・『唐音統籤』五六二などには、「江湖」に作る。

○載酒行――酒罅や酒壷を船に載せていく。江南の水郷地帯での放蕩にちなむ表現。

○楚腰――楚の国の美女（宮女）のように、かぼそい腰。ここでは、そうしたタイプの歌姫・妓女のこと。『後漢書』二四、馬寥伝にいう、「楚王、細腰を好み、餓死するもの多し」と。

○腸断――腸がちぎれる。平仄上「断腸」を倒置する。ここでは、胸が締めつけられるような愛らしさ、恋幕の情をかきたてる愛しさをいう、口語的用法。通常の深い悲しみを表わす用法ではない。『才調集』『唐闕史』『本事詩』など、「纖細」（纖細）に作るものも多いが、細・軽の二字が意味的に重なりすぎよう。

○掌中軽――たおやかな美女の形容。掌は、手のひら。前漢の成帝の寵妃趙飛燕は、「身軽く、能く掌上の舞いを為し」たという。（『独異志』中）。また舞人の張浄婉は、「腰囲一尺六寸、時人咸な掌上の儛いを能くすと推う」と。（『南史』六三、羊侃伝）。

ちなみに、『唐闕史』『本事詩』『唐音統籤』には、「楚腰纖細掌中情」（楚腰纖細　掌中の情）に作る。

「掌中の情」とは、遊女を抱きしめた時に生じる歓喜の情をいう。杜牧詩の初案か。

○十年――十年にも及ぶ、放蕩三昧に明け暮れた青春の日々。二十六歳のとき、江西観察使の幕僚として江南の洪州に着任して以来、宣州・揚州での幕僚生活を含めた、あしかけ八年の歳月を指す。

特に最後の揚州在任時は、毎晩、酒と女に耽溺したと伝える。杜牧の「刑部の崔尚書に上る状」にいう、「十年　幕府の吏と為り、毎に簿書・宴遊の間に促束たり（あわただしく暮らす）」と。

『唐闕史』『本事詩』には、十年を「三年」に作る。三年の文字は、揚州在任期間と一致しており、初案の可能性が高い。

○一覚――ハッと夢から覚めて、我に返る。

○揚州夢――揚州で過ごした、一場の夢のような歓楽の日々。『夾注』には「楊州夢」に作るが、底本に従う。

○占得――ただ……だけを手に入れた、の意。『才調集』『唐闕史』『本事詩』以下、占得を「籯得」に作るものも多い。「籯ち得たり」とは、得たものといえば、結局これだけだ。といった自嘲・悔恨の気分を漂わせる口語。中唐期に現われ、晩唐期に盛行した。「占得」の類語。

○青楼――ここでは、妓女の住む妓館・遊郭の類をいう。こうした用例は、すでに梁の劉邈「万山采桑の人を観る」詩のなかに、「倡妾愁いに絶えず、結束（身じたく）して青楼を下る」と見える。

○薄倖――憎らしい浮気者、唾薄な浮かれ男の意。恋愛関係における、薄情や裏切りを表わす口語。『本事詩』『夾注』には、類語の「薄行」に作る。

【詩の種類】七言絶句。

【参照】『杜牧詩選』　訳・松浦友久、植木久行　岩波文庫　２００４年１２月１５日第２刷